

7月10日 第3回まちづくり評価委員会 会議概要

日 時：平成21年7月10日（金）10:00～12:00

場 所：消防局庁舎3階第2会議室

出席者：（委員）

菊池委員、駒井委員長、榊原委員、四宮委員、鈴木委員、田中委員、
長井委員、西原委員、野々山委員、室谷委員、森川委員（50音順）

（事務局）

廣川企画調整部長、福本政策担当課長、黒澤主査、宮川主任、田部井

欠席者：金井副委員長

傍聴者：なし

資 料：別紙のとおり

概 要

（開 会）

企画調整部長あいさつ

1 協議事項について

（1）市民が実感する元気な横須賀について

事務局から、資料5に基づき、「市民が実感する元気な横須賀」について、市民アンケート結果について説明を行った。

（駒井委員長）

- アンケート結果をみると、元気な横須賀についての回答理由と元気な横須賀を実現するための施策の優先順位とに関係性が見られないと感じる。

元気な横須賀についての主な回答理由は、イベントや商店街のことが主で、働く場所については出てきていない。

一方、優先して取り組むべき課題については、雇用の問題や犯罪についての問題が意見として多く捉えられている。同じことについて聞いた結果として判断してよいのか、別のものとして捉えたほうがよいのか。

（事務局）

- アンケートのとり方についてはこれまでもいろいろご指摘いただいている。

今回のアンケートの設問の構成は、施策の柱ごとに順番に実感を伺い、最後に目標である、元気な横須賀について全体でみてどうかという聞き方をしている。

しかし、回答をみると、前からの質問の積み上げからトータルで答えられているのではなく、元気な横須賀という設問に対する感覚だけで回答されているような印象を受ける。アンケートでは、新世紀ビジョンの政策・施策の組み立てが理解されていないと感じる。

(駒井委員長)

- ・ 私の感想では、アンケート調査表の元気な横須賀の設問のページに、朝市やみこしの写真が掲載されている。これが回答に影響しているのではないかと感じる。
ここには、写真を掲載しないほうがよいかもしい。

(事務局)

- ・ アンケートでは回答用紙と一緒に、資料編として市の具体的な事業や指標の状況を掲載した冊子を送付した。ある程度の予備知識をもってアンケートに答えていただくという試みであったが、その資料や写真のイメージが逆に、回答に影響してしまったと感じている。

(田中委員)

- ・ 元気な横須賀は新世紀ビジョン全体のキャッチフレーズだと思う。このビジョンを理解している人は、全体の施策を通してその集大成が元気な横須賀だと評価していると思う。一方で、あまりにもわかりやすい言葉であるがゆえに、元気な横須賀という言葉の雰囲気だけで回答している人が多いように感じる。
- ・ 優先すべき施策の順位についての回答については、昨年10月以降の経済状況が反映されているもので、横須賀だからということではなく全国どこの自治体でもこの項目が優先課題のトップになってくる。
- ・ 7・8年前までは、高齢者施策がトップであった、しかし、介護保険の問題がほぼ落ち着いてきたとたんに、安全・安心がトップになりこれまで推移してきたが、昨年からは雇用、経済が一番の課題になってきている。これは横須賀だけでなく、わが国全体の傾向だと思う。
- ・ したがって、意識調査は、そのまま素直に市民の考えとして捉えてよいと思う。
- ・ 他方、元気な横須賀について、資料では、前年との比較で、後退の傾向を示しているが、資料5の4ページのグラフを見ると、平成21年度のアンケート結果は、4つの将来像すべての評価が、第一象限にある。第一象限は4つの区分のなかでは最もよい状況で、以前よりもよくなっているし、現在の状況もよいと判断されているのである。
- ・ 平成20年度の場合は、第二象限に2つの将来像が入っていたが、平成21年度はそれが改善されている。
- ・ 元気な横須賀という設問で見ると、多少数字が下がったように見えるが、全体としては、行政の行っている施策が市民に受け入れられ、評価されているのではないと思う。
また、5ページには施策の方向性ごとのアンケート結果が掲載されている。私は、このような分析を他の都市で行っているが、こんなに多くの施策が、第一象限に集まっている都市はあまり見ることがない。市の取り組みに自信を持ってよいのではないと思う。

(駒井委員長)

- ・ 属性別の回答傾向をみると、男女差が大きく、50歳代がマイナスになっている。回答者の元気を反映しているのではないか。

(田中委員)

- ・ 雇用に対する危機感とも考えられる。

(四宮委員)

- ・ 属性別の傾向でみると、一つは、元気な横須賀には地域差が見られるように思う。
- ・ 職業別でも、回答傾向に違いがある。そのギャップを埋めていくような展開も必要だと感じる。

(駒井委員長)

- ・ 39 ページをみると、地域別の傾向では浦賀がよくない。将来像別にみても低いのか。

(四宮委員)

- ・ そうではないようだ、元気な横須賀という総論で低い傾向なのだと思う。

(榊原委員)

- ・ 京浜急行沿線に関しては元気に感じる。一方、バスを利用する必要がある地域は元気がないように感じる。
- ・ 衣笠地域はJRの駅はあるが、にぎわいがなくなっていると感じる、以前は、商店街がとてにぎわっていたが、平成町のショッピングセンターなどができたりして客が流れたように思う。
- ・ また、衣笠十字路はバリアフリーではない。横断歩道がなく地下通路を使わなければならないので、移動は大変だと思う。
- ・ 西地域については、他の地域とは異なる。住むことに満足している人はいるが、まちのにぎわいに関しては、発展性がみられない。横須賀市全体でみると、将来的に西地区の賑わいが経済効果を誘うと思う。
若い働く世代は交通の便が悪いので、東京近郊に出ていく人もいる。

(駒井委員長)

- ・ 地域別の差が大きい設問と、そうでない設問がある。元気な横須賀という設問が一番ぼんやりした設問内容だと思うが、地域差が他の設問と比較して大きいことは不思議に思う。

(四宮委員)

- ・ 委員長ご指摘のとおり、将来像別にみると、地域差がない項目もあるが、にぎわいなどではその差が大きく見える。

(駒井委員長)

- ・ 地域別に各将来像を集計してみると、別のことがわかってくることもあるかもしれない。

(田中委員)

- ・ 皆さんの指摘のとおり、元気な横須賀の実感についての地域別の差は、地域がおかれている状況をそのまま表しているのだと思う。衣笠については、メインの商店街がどんどん衰退していて、かつての勢いがないことを地域の人も感じていると思う。浦賀はドックが撤退し、その後の土地利用について検討している最中なので、動き始めれば実感もよくなるのではないかと思う。
- ・ アンケート結果について謙虚に受け止めることは大事である。
- ・ 一方で、5 ページの表をみると、第一象限にある、良い評価を受けている施策につい

ては、以前であれば、行政はこれを維持していこうとしていた。逆に、第三象限にある、現状の評価も悪く、以前との比較でも後退しているような施策は、問題だから、もっと投資して、第一象限に持っていこうとすることが、これまでの判断であったと思う。これは右肩上がりの経済成長の時代の判断である。いまは、第一象限にあるものは、多くの方が良いと評価しているのだから、あまり投資をしなくて、少し減速するべきなのではという判断、また、第三象限にある施策については、これまで大きく投資をしてきても、なかなか効果が出ないのであれば、取り組み内容を完全に見直すべきなのではという判断をしなくてはならない時代になってきたと思う。

- ・ アンケート結果は謙虚に受け止めるべきだが、この結果をみて、短絡的に、特定の地域の結果が悪いからそこに投資すべきだということに結びつけるのは危険だという感じがする。
- ・ 西地域は、不便だが満足している面もあるという話があった。ここが大事で、衣笠の商店が従来の取り組みを続けていてもお客を獲得することは難しい。横須賀市民が平成町などのスーパーを選択していることなので、これに対しては、商店街が持っているコミュニティの核としての機能などを作り上げていく必要がある。
- ・ これは行政がどうにかするというのではなく、地域の中でそのことに気がついて動いていくことで変化が現れてくると思う。
- ・ また、西地域に行くと現地の人から不便だという声を聞く。しかし、それに不満だから出て行くということではなく、自然環境に満足していてずっとここにいたいという人が多い。
- ・ このような地域の特性を踏まえ、これからは、行政に頼るのではなく、地域で自分たちができることを考え、それを行政が応援していくというような視点で、考えていくことも必要だと感じる。

(野々山委員)

- ・ 田中委員の意見に同感する。西地域は確かに不便でショッピングセンターも少ないが、道路整備が進み、以前に比べると、市の中心地までのアクセスはとてよくなったと思う。バスで市の中心部までいくのはこれまでどおり時間がかかると思うが、車での移動はだいぶ便利になった。

(榊原委員)

- ・ 場所によると思う。衣笠十字路はいまでも渋滞している。これから自分で運転することが困難な高齢者が増えることも考えられる。

(野々山委員)

- ・ 西地域の良さはあり、夏場はにぎわいがある。情報誌に掲載されるような飲食店もある。また、衣笠の商店街も以前と比較して厳しい状況にあると思うが、何とかしようとする努力が感じられるし、住民も多い。
- ・ 地域ごとの差は地域の取り組みで解消できると思う。浦賀についても、ドックの閉鎖はあるが、その後の土地利用について地域で考えており、イベントなどにも取り組んでいる。
- ・ ただ、以前との比較では市民は厳しく感じているように思う。
- ・ 追浜地域も西友の撤退や、個人商店がつぶれている状況にある。周辺に大型店ができたことが影響していると考えられる。
- ・ 全体的な感覚として市の施策はよく取り組まれていると感じる。

(菊池委員)

- ・ 横須賀を一つのまちとして、なにかこれだという取り組みを見出すことは大変難しいと感じる。これは、どこの都市もそうだと思うが、横須賀は特に、半島に位置し、谷戸などもある。また、アクセスの面などで、東京湾側と相模湾側ではまったく雰囲気が違うし、西地域でも秋谷、長井では雰囲気が違う。しかし、それぞれ必ずポイントとなるものを持っている。
- ・ 元気の源は、それぞれの地域に住む人が、住んでいる地域にどれだけ愛着を持っているかだと思う。
- ・ 多くの人が地域に愛着をもつことが、全体の元気につながると思う。自分たちの生活空間がどういうものであって、その良さが何か、どのようにしていきたいということを皆が認識し、共有することが大事なのだと思う。
- ・ 行政としてできることは何かというと、地域の持つ資源、財産を、地域に住んでいる人に認識してもらい、見直してもらうことが大事だと思う。
- ・ 以前から取り組まれている産業情報紙のように、地域のポテンシャルを吸い上げて、それを市全体で共有してもらうこと、またアピールすることが、住んでいる人たちのステータスにもつながるし、愛着心にもつながると思う。
- ・ これはすぐにできることだと思う。今まで埋もれていた資源を、表に見出すこと。これが、子どもたちから高齢者まで地域に住む人が、地域の良さを認識、共有しようとする力になると思う。この力が地域への愛着心につながり、横須賀の元気の根本になると思う。

(鈴木委員)

- ・ 以前、追浜、田浦、逸見地域は、横浜から横須賀にくる通過地点で発展しないということが言われてきた。これに危機感を持った追浜の観光協会や社会福祉協議会が一所懸命に取り組み、今は元気になっていると感じる。
- ・ これからは、地域の住民が、自分の地域をどうするかを考えなくてはいけないのではないかと思う。

(長井委員)

- ・ アンケートでは、「元気な横須賀」について、前年よりよくない結果が出ているが前年と変わらない気がする。元気がどうかの回答については、回答用紙のお祭りの写真のなどに影響していると思う。
- ・ 優先すべき課題については、5番目の「にぎわい」以下の施策の方向性については、現状はよいと市民は判断しているのではないかと思う。
- ・ 優先課題の一番が、「多くの人が働くことができるまち」で、二番目が「犯罪がないまち」となっていることについて、個人的に違和感がある。横須賀に住んでいる人で、多くの人が横須賀市内で働きたいと考えているのか疑問。また、雇用問題については、地域の状況もよくないとは思いますが、派遣切り報道などの影響が出ているのではないかと感じる。また、犯罪がないまちの優先順位が高いのは、過去の米兵による事件が大きく影響しているのではないかと感じる。さらに、犯罪とは直接は結びつかないが米軍の原子力艦船の報道も影響しているのではないかと感じる。

(室谷委員)

- ・ 「元気な横須賀」について自分が聞かれたら、何が元気だったらよいのかわからないが、これまで皆さんの話を聞いていたら、自分が感じる元気には、地域で自分たちが元

気になる活動ができるということが重要だと感じる。

- ・ 地域で活動するためには、外にでて情報を得る必要があると思う。そこに行けば地域の情報を得ることができる、そんな溜まり場が地域の商店街などにあれば出て行こうという人が増えるのではないかと思う。
- ・ 行政は、空き店舗などを借り上げ、場所を提供する。それだけでよく、後は地域の人たちが、そこで自分たちもまちをどうしたらよいかを考える。そんな仕組みが少しずつでもできてくれば地域が元気だということになり、全体の元気につながるのではないかと思う。
- ・ 横浜の六角橋商店街が元気だといわれている。神奈川大学の学生がまちづくりに参加していることもあるが、まちの真ん中に情報が交換できる場所がある。誰が入ってもよい、たまり場があることが、まちを活性化させる一つの動機付けになると思う。

(鈴木委員)

- ・ 大津地域は福祉が進んでいるといわれていて、その取り組み内容を他の地域の人が聞きにくる。これにより大津は元気だという評判がひろがる。
- ・ 追浜がにぎわってきたとわかったら、他の地域の人が見に行き、話をし、学ぶことが必要だと思う。

(森川委員)

- ・ アンケートの概要では、年齢別のクロス集計が30歳代以下で括られているので、20歳以下の傾向はわからないが、若い人たちはあまり横須賀の情報を知らないし、関心が無いと思う。一方で、メディアに影響されやすいと感じる。宮崎県、大阪府のことがたくさん報道されていることに比べると横須賀は元気がないと短絡的に評価してしまう気がする。若い世代にどうやってアピールすることができるかがポイントだと思う。
- ・ ボランティアに参加して感じることは、若い世代の参加が少ないこと。これからの横須賀を担う世代をどうやって巻き込んでいくかを考える必要があると思う。

(菊池委員)

- ・ 義務教育の段階の子どもたちが地域に関わりをもてるかが大事なことだと思う。
事例として、鷹取中学校の3年生が全国ものづくりキャラバンのお弁当コンクールで全国大会に行った。誰かのためのお弁当というテーマでレシピをつくり、実際に作るという内容であった。
地域のアイデアを何とか商品化できないかということで、企業に呼びかけ商品化してもらった。お弁当の値ごろ感としては500円以下になるが、その金額ではビジネスとして成り立たないので、800円の値段設定をして、追浜のイベントでその発案者が販売した。雨の日のイベントであったが、地域の人たちが買いに来てくれて200食が1時間ぐらいで完売した。この結果は地域の鷹取中学校の子どもたちが考案したということが大事なことで、地域の子どものアイデアを地域に還元することで、子どもたちは地域に愛着をもつようになる。
- ・ このような取り組みが連鎖すると、地域が特徴をもって、元気になるのではないかと感じる。
- ・ 先日、キャリア教育推進協議会で先生も地域との関わりを模索しているとの話があった。関わりを持つことは簡単なことで、例えば地域にケーキ屋さんがあれば、子どもたちがレシピを考えて販売するだけでも、地域の力になると思う。それはビジネスにもなり産業振興にもなる。

- ・ 地域にはアイデアが豊富にある。それが採用されることで大きな力になると思う。それは大学生でも同じことで、まちづくりにも生かすことができると思う。

(室谷委員)

- ・ 今の若い人たちは何かきっかけがあればまちに貢献したいという気持ちは持っていると思う。先ほどの六角橋商店街の事例で、神奈川大学の学生が商店街で結婚式をして、商店街を歩くというようなイベントを行い、多くの若い人が集まった。若い人は多くのアイデアを持っている。何かきっかけと溜まり場が必要だと思う。それにより元気になると思う。

(菊池委員)

- ・ 若い人のアイデアを採用してどう生かすかという場合、核になるような場所や組織がない。

(野々山委員)

- ・ 現在、小・中学校では、総合学習の時間において、地域に学び、地域に貢献すること、地域で育ててもらって、一度外に出ても地域に戻って育ててもらった自分ができることは何かを考えることができるよう児童・生徒を育てている。
- ・ 地域のお店にも行き、職場体験などもしている。また、学校によっては地域の方にゲストティーチャーをしてもらったり、ボランティアで協力いただいたりと学校現場ではさまざまな取り組みをしている。
- ・ お年寄りも地域で頑張っている。子どもたちも地域に溶け込んでいる。これからは高校生ぐらいの年代をどうやって取り込んでいくのかを考えることが重要だと思う。

(菊池委員)

- ・ 義務教育において、地域との関わりはあると思うが、学校側からお願いをしていることだと思う。これでは受け皿の事業者などは、受身の姿勢で、子どもたちも場を借りているという感覚だけで、決して地域で育てられているという感覚は持たないと思う。
- ・ 学校と受け皿側である事業者と一緒に子どもたちになにを教えるのかということを知ることが必要である。同じ立場、同じ目線で、子どもたちを、テーマに基づいてできているかどうかなど評価していく必要がある。
- ・ 双方にとってメリットのある取り組みでなければ、また、どちらかが負担になるようなものでは成り立たないと思う。
- ・ 子どもたちの新鮮なアイデアがビジネスにつながることで双方にメリットになり、地域にとってもよいことだと思う。
- ・ キャリア教育の取り組みが進んでいる中で職場体験などたくさん行われているが、あくまでも事業者側は受身の立場だと思う。
- ・ 双方にメリットがあるようにするため、産業界が主体となり、教育委員会と市と商工会議所が一緒になって中学生の総合的な学習の時間のカリキュラムを学校と一緒に作り、子どもたちの地域感の醸成や産業教育に関わっていく取り組みを始めている。このことで初めて成り立つのものだと思う。

(鈴木委員)

- ・ 地域は、学校について「学校のあるまち」ではなく「まちの中にある学校」という考えで、学校と付き合っていくことが大事である。

(野々山委員)

- ・ 今はそういう考え方になっていると思う。
- ・ 地域の中の学校という考えのなかで、地域と一緒に子どもを育てていくという捉え方をしていると思う。

(菊池委員)

- ・ 地域はそういう捉え方をしているのか。

(野々山委員)

- ・ なりつつあると思う。いろいろなことで協力していただいている。

(田中委員)

- ・ 地域が元気になることが重要だということは共通認識だと思う。
- ・ いま、都市計画マスタープランの見直しで各地域を回っている。都市計画マスタープランはどちらかというとハード面の計画で、ハードの視点で、地域ごとの方向性を考えている。一方、福祉のことで言えば、地域福祉計画があり、福祉の分野で地域別に支えあいの社会を作ろうとしている。
- ・ 地域の人にしてみれば、福祉も都市計画も関係なく、自分たちの生活レベルで課題を抱えている。しかし、行政の施策は縦割りの計画になっている。
- ・ 地域全体で見た時に、このまちをどうしたらよいかという観点で計画づくりを考えていくことが大事なことだと思う
- ・ これまでの市の計画には、地域別の計画はおそらく無いと思う。自分たちが住んでいる地域を5年後10年後にどうしていくべきかを、地域の人が集まってまちづくりを考える。そこに福祉や都市、産業などさまざまな分野が入っていく。そのような取り組みがこれからのまちづくりなのではと感じる。
- ・ 場が無いという話があったが、市民のたまり場としては、横須賀には各地域に行政センターがある。ここを活用していくことが重要だと感じる。
- ・ 地域別の計画を、行政が作るのではなく、地域でそれぞれの計画を作っていくという投げかけをすることもこれからの計画推進の一つのあり方だと思う。

(駒井委員長)

- ・ 元気がそうでないかということが、アンケートでは問われているが、今までの議論では、そうではなく元気が出る方法の意見がどんどん出てきてよかったと思う。

(鈴木委員)

- ・ これまでの議論の中で、元気が出るにはどうしたらよいかということについては、ちょっとしたきっかけが重要だということがわかったと思う。

(駒井委員長)

- ・ 少なくとも、市民が実感する元気な横須賀は、新世紀ビジョンで掲げた4つの将来像と8つの施策の方向性を集約した結果では必ずしもないらしいことが皆さんの議論からわかってきたと思う。

(2) 平成21年度まちづくり評価委員会報告書(案)について

- ・ 事務局から、まちづくり評価委員会報告書(案)について、報告書の構成について説明を行った。

(室谷委員)

- ・ P.2 今後の取り組みの方向性に対する意見 3つめ
「メディアに対する露出の仕方を…」は、「メディアの活用方法を…」に変えるなど、露出という言葉は使用しないほうがよい。
- ・ P.7 今後の取り組みの方向性に対する意見 5つめ
所得の低い世帯の学力が低いと書かれている。統計上の数字があればよいが、言い切っていてよいか疑問である。1つの要因であるかもしれないが、報告書としては相応しくないと感じる。

(野々山委員)

- ・ 確かに所得と学力の関係は必ずしもそうとは言い切れない。

(駒井委員長)

- ・ 「露出」については、表現を修正する。
- ・ 学力の問題については、低所得が最大の要因かは分かりにくい点である。統計で、所得と学力に相関があったとしても要因であるかは分からない。

(室谷委員)

- ・ P.13 現在の状況に対する実感 5つめ、6つめ
米軍だからという意見は持たないほうがよいという意見について、米軍と協働したり繁栄したりするような明るいイメージもよいと思う。しかし、犯罪において議論する場合、どうしても基地の問題が出てくるのは、米軍人が起こした犯罪は、(日米地位協定が問題となり)日本の警察が積極的に関与することができず、犯罪を確定するのに時間を要してしまう場合があり、このことが被害者の感情としてあるからだと思う。この市民感情についても1つの意見として追加して欲しい。
- ・ 犯罪の発生件数は少ないのに犯罪が多いと感じてしまうのは、市民感情に影響される部分があると思う。

(駒井委員長)

- ・ 意見として報告書に追加する。

(西原委員)

- ・ P.2 今後の取り組みの方向性に対する意見 4つめ
馬堀海岸IC付近の土地利用について、事業者の公募は、第1回委員会(6月22日開催)の時点では開始されていないが、現在は開始されている。また、アートペイントについても復活予定ではなく、復活することが決定されている。報告書としては、表現を修正しなければならない。
- ・ 横須賀に人を呼び込むためには「観光」も1つの方法であるが、「観光」までいなくても、様々なイベントを行うなど話題性のあるものの1つとして馬堀海岸ICの土地利用やアートペイント復活へ動いている。

- ・ アートペイントは、住民の中で若干の異論もあった。しかし、最終的には当初の予定を少し変更し、横須賀美術館の近くに描くよう変更して動き出した。応募が 100 点程度あるので、審査で 20 点程度に選出する。7月に最終審査を行い、8月に描きはじめる。
- ・ 新しいものをいくつか発信しないと人は呼び込めないと思う。

(駒井委員長)

- ・ 会議概要としてはそのままの表現でよいが、報告書としては修正が必要である。関係部局に確認して修正することとする。

(田中委員)

- ・ P. 7の室谷委員が指摘された点について、確かにこのままの表現だと所得の低い世帯は学力が低いになってしまう。所得が低くても学力が高い世帯もある。発言の意図としては、虐待などが起きている一方で、学力が下がっているという事実がある。それが所得の格差などに影響されていることは本来の姿ではないと言いたかった。
「昨今の子どもの学力低下問題の要因の1つに所得格差によることが指摘されている。」と修正していただきたい。

(駒井委員長)

- ・ 今後の方向性についての意見なので、「収入の差が学力の差に現れないような施策が必要。」という表現がよい。

(長井委員)

- ・ P. 10 今後の取り組みの方向性に対する意見 2つめ
団塊の世代の大量退職などでボランティアに参加したいが参加方法が分からない人もいる。ボランティア情報はあがるが、散発的でまとまってはいない。毎月でなくとも、3ヶ月ごとにボランティア情報を集約して発信して欲しい。初めてボランティアに参加したいと思っている人が、何のボランティアがあるか知ることができ、選ぶことができる。

(駒井委員長)

- ・ 報告書の「もっとアピールすべき」という意見は、「何をすべきか分かりにくいので情報の発信について工夫する」というような内容に修正する。

(鈴木委員)

- ・ 横須賀には 17 のボランティアセンターがあり、ボランティア募集の情報を知ることができる。

(駒井委員長)

- ・ そのことも周知することが必要である。

(事務局)

- ・ もう少し具体性のある表現に修正する。

(駒井委員長)

- ・ 以上、指摘された点を反映させた報告書を作成し委員会の意見としてまとめることとする。

(3) 全体に対する意見

(野々山委員)

- ・ 京急電鉄がゴミ袋を配布した取り組みはよいと思う。横須賀は、場所によるがきれいなまちではないと感ずることがある。町内会ではボランティアが清掃など行ってきれいであるが、人が集まる場所はきれいではないと感ずてしまう。人はきれいなまちに行きたいのだと思う。

(駒井委員長)

- ・ 「1-1 多くの人が訪れるまち」の意見として追加する。

(榊原委員)

- ・ よこすか京急沿線ウォークという取り組みで三崎口からゴミ袋を持って歩いたことがある。しかし、みんなゴミ拾いに一生懸命で景色を楽しむことができなかつた。大きな荷物を持って歩くには危険な場所もあつたので、場所は考慮して欲しがつた。

(西原委員)

- ・ ゴミについては、市とクリーンよこすか市民の会と京急電鉄と3者で協定を結んでいる。具体的な活動としては、あらかじめ市民にゴミ袋を渡しておいて、家から駅までの道のりにおいてゴミを拾ってもらい、拾つたゴミは駅に渡すという取り組みを行っている。また、帰宅時においてもゴミ袋を渡して拾って帰ってもらう。しかし、まだゴミを持っていく姿をあまり見かけない。

(四宮委員)

- ・ PRも含め、これからの取り組みである。

(西原委員)

- ・ これから市、クリーンよこすか市民の会、京急電鉄の名前が入つたゴミ袋を製作し、目立つよう取り組むことにしている。
- ・ 野々山委員の発言のとおり、横須賀中央駅周辺は清掃していてもゴミや吸殻は出てくるので、きれいになつていないように感ずる。いずれ、ポイ捨て禁止区域を強化・拡大することが必要かもしれない。

(四宮委員)

- ・ 駅でのゴミの受付などは、できることから始めようとした活動であつた。鉄道会社として、社会貢献できる取り組みをスタートさせることが目的としてあつた。

(駒井委員長)

- ・ 「きれいな横須賀」という内容を報告書「将来像1 にぎわいを生む社会」に記載することにする。

(閉 会)

- ・ 平成21年度まちづくり評価委員会報告書の確定方法について説明。
- ・ 会議概要の公開について説明。

以上